

実践のまとめ（第6学年 外国語科）

見附市立見附小学校 教諭 渡邊 優希

1 研究テーマ

友達と関わり合いながら、学びを広げ、表現力を高める児童の育成

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

学習指導要領（平成29年告示）では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する」ことを目標としている。また、外国語による言語活動は、「身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う」と定義され、言語活動の重要性が示されている。さらに、児童が充実した言語活動を行うには、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することが大切である。

これまでの授業を振り返ると、「カルタ」や「Kahoot!」などに多くの時間をかけ、単語のインプットに力を入れた指導を行ってきた。その結果、自信をもって単語の意味を答えたり英語での質問にもすぐ反応したりして、英語の授業を楽しんでいる姿が多くの場面で見られるようになってきた。しかし、学んだ表現を使って自分の考えを伝える言語活動になると、「もっとこんな表現を言ってみたい!」「友達が使っている表現を自分も使いたい!」と学びを広げようとする児童は少なく、表現することに自信をもつ姿にはなかなか至らなかった。その要因として、友達と関わりながら自分の考えを表現する言語活動の機会が少なかったことが挙げられる。言葉を単に知っているだけでは表現への意欲は高まらない。相手意識や目的をもった言語活動を充実させてこそ、児童の表現力が高まっていくと考えられる。

そこで、児童の思いを大切にしたい言語活動の充実を図る。児童にとって身近な目的・場面・状況を設定し、自分の言いたいことを表現するための段階的な活動を設定し、少しずつ表現を増やしていく。その際に、ペア活動を繰り返し入れて、自分の表現を確かめたり、練習して慣れさせたりして、言語活動に自信をもたせていくようにする。そして、自分の思いに寄り添った表現へと少しずつレベルアップさせることで、表現を工夫する楽しさを味わわせていく。

このことにより、児童の自己表現力を高めていくことができるようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 目的・場面・状況を明確にした単元目標の設定

児童の思いを大切にしながら、最終ゴールを児童と共有し、その目標達成に向けて言語活動を軸とした単元づくりや日々の授業の課題を設定する。

② 自分の言いたいことを表現するための段階的な活動の設定

前半に個人の課題を解決するThinking timeを設けて、個々で課題を解決する時間を設定する。その後、自分の考えを広めたり、深めたりするために、中間指導を行い、表現の幅を広げていく。その際、念押し言葉や、したこともう一つ、感想、自分が好き、質問など、表現をより充実させる英文（または言語材料）を「レベルUP表現」と称し、教師・児童間で共有をする。

③ 繰り返し行うペア活動の組織

繰り返しペア活動を行う中で、自分の表現を練習しながら確かめたり、慣れさせたりする。また、表現の仕方を工夫する度に、確認したり練習したりすることで、表現することに自信をもたせていく。

④ 振り返りによる意欲を高める工夫

「よくできた」「楽しかった」だけでなく、学びの効果を実感している姿をクラスで取り上げ、次の単元で見通しをもつ際に活かす。また課題を意識している児童には励ましを与え、次の学びにつながるように導いていく。

(3) 研究テーマに関わる評価

- ① 「振り返りシート」に、友達との関わりによって自分の成長を記述する児童が増える。
- ② 「動画撮影」によって、相手を意識した表現が増える。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

This is Japanese hero.

【This is my hero. Bluesky（啓林館）】

(2) 単元（題材）の目標

日本の偉人について、その人の職業・特徴・偉業をALTに伝える活動を通して、相手を惹きつける言葉を使うと、相手が興味をもってくれることに気づき、レベルUP表現を取り入れて自分の発表をよりよいものにすることができる。

(3) 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	<p><知識> ・ 人物の特徴やしたことを表す語句や表現について理解している。</p> <p><技能> ・ 上記表現を用いて、自分のJapanese heroについて伝える技能を身につけている。</p>	<p>・ 相手のことをよく知るために、Japanese heroについてまとまった話を聞いて概要を捉え、必要な情報を聞き取っている。</p>	<p>・ 相手のことをよく知るために、Japanese heroについてまとまった話を聞いて概要を捉え、必要な情報を聞き取るようとしている。</p>
話すこと	<p><知識> ・ 人物の特徴やしたことを表す語句や表現について理解している。</p> <p><技能> ・ 上記表現を用いて、自分のJapanese heroについて伝える技能を身につけている。</p>	<p>・ ALTに自分のJapanese heroについて知ってもらうために、その人の特徴やしたことについて、相手を惹きつけるレベルUP表現(念押し)の言葉、したこともう一つ、感想、自分が好き、質問など)を用いて相手に伝えている。</p>	<p>・ ALTに自分のJapanese heroについて知ってもらうために、その人の特徴やしたことについて、相手を惹きつけるレベルUP表現(念押しの言葉、したこともう一つ、感想、自分が好き、質問など)も用いて相手に伝えようとしている。</p>
読むこと	<p>・ 音声で十分慣れ親しんだ人物の特徴やしたことを表す語句や表現について、その文字と音との関係を理解している。</p>	<p>・ 他者のことをよく知るために、その人があこがれる人について、簡単な語句や基本的な表現で書かれた文を読んで、意味が分かっている。</p>	<p>・ 他者のことをよく知るために、その人があこがれる人について、簡単な語句や基本的な表現で書かれた文を読んで、意味を捉えようとしている。</p>
書くこと	<p><知識> ・ 音声で慣れ親しんだ人物の特徴やしたことを表す語句や表現について、その文構造を理解している。</p> <p><技能> ・ 上記表現を語順を意識しながら、文を書くときのルールに沿って書き写す技能を身につけている。</p>	<p>・ 他者に自分のことを分かってもらうために、見本をみながら簡単な語句や基本的な表現を書き写して表現している。</p>	<p>・ 他者に自分のことを分かってもらうために、見本をみながら簡単な語句や基本的な表現を書き写して表現しようとしている。</p>

(4) 単元の指導計画と評価計画（全8時間、本時7／8時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 (2)	・単元の目標の確認 ・Japanese heroの調べ学習	◎ALTの先生は何て言っているかな？ ◎ALTの先生に伝えるために、どんなJapanese heroがいるか調べよう。	本時では記録に残す評価は行わないが、目標に向けて指導を行う。児童の学習状況を記録に残さない活動や時間においても、指導者が児童の学習状況を確認する。
2 (3)	・Japanese heroの名前・職業 ・Japanese heroの性格 ・Japanese heroのしたこと	◎Japanese heroの名前と職業を言ってみよう。 ◎Japanese heroの性格を言ってみよう。 ◎Japanese heroのしたことを言ってみよう。	【知・技】 Japanese heroの名前と職業を書くことができる。【ふりかえりシート】 【知・技】 Japanese heroの性格を書くことができる。【ふりかえりシート】 【知・技】 Japanese heroのしたことを書くことができる。【ふりかえりシート】
3 (2) 本時	・Japanese heroの紹介(ペア) ・Japanese heroをレベルUP表現を用いて紹介(ペア)	◎Japanese heroを友達に紹介しよう ◎レベルUPして、Japanese heroを友達に紹介しよう	【思・判・表】 Japanese heroを知ってもらうために、基本的な表現を用いて相手に伝えることができる。【動画】 【思・判・表】 Japanese heroをもっと詳しく知ってもらうために、基本的な表現を用いて相手に伝えることができる。【動画】
4 (1)	・ALTにJapanese heroの紹介	◎ALTの先生にJapanese heroを発表しよう	【知・技】 学習した語句や表現について理解し、Japanese heroについて伝える技能を身につけている。【発表】 【思・判・表】 相手のことをよく知るために、Japanese heroについての発表を聞いて、必要な情報を聞き取っている。【ワークシート】 【態度】 Japanese heroを伝えるために、相手を意識しながら伝えようとしている。【発表】

4 単元と児童

(1) 単元について

第5学年では、自分があこがれる人や、身の回りの人から1人選び、その人の性格や得意なこと・できることをMy heroとして紹介した。その際、My heroが単元の最後まで見つけられず、困った児童が何人もいた。また、身近な家族や好きな芸能人をMy heroに選ぶことで、得意なことやできることのみでの紹介になりがちだった。さらにこの単元で身につけてほしい偉業を伝える過去形の表現を使う必然性がない児童も多く見られた。

本単元では、Japanese heroをALTに紹介し、それを聞いてALTが興味をもち、家族に紹介するという目標を設定する。そこで、児童はJapanese heroを詳しく調べようとし、それを知ってもらいたいという思いを伝えるには、どんな英語表現を使えばよいか考えようとするができると考える。またその英語表現のうち、偉業を伝えるため、過去の表現を使うことが必要となる単元となる。

単元の導入では、3月に日本に来たばかりのALTが、「日本にどんなheroがいるのか教えてほしい。」と動画で児童に問いかける。そしてALTは、「大谷翔平、宮崎駿、山中伸弥しか日本の有名な人は知らない。」と話す。さらに「来年アメリカに帰国したときに、家族に日本や世界で活躍する日本人をJapanese heroとして紹介したいので、教えてほしい。」と児童に問いかける。これにより、ALTにJapanese heroを紹介しようという目標を設定することで、自分にあこがれる人だけでなく、日本人に広く認知されている有名人でもよいという選択の幅をもたせることができる。また、「ALTが家族に伝えたい」という要素を入れることで、児童がどうすればALTの印象に残るのかを深く考え、表現方法を工夫していくことを期待する。

単元の目標設定

△ My hero・・・自分にとってのあこがれの人

○ Japanese hero・・・ALTが家族に紹介したくなる日本の素晴らしい人

(2) 児童の実態

本学級の児童は、外国語の授業への意欲は高く、友達とやりとりを進んで行き、単元の目標達成に向けて、よりよい表現を使おうと努力する児童が多い。また、クロームブックによる語彙の習得や、スライドを使つての発表などもスムーズに行うことができる。しかし、毎時間の振り返りでは、「〇〇が楽しかった」という記述をし、単元のまとめになると、「どんな英語を使つて発表すればよいのだろう」と悩む児童もいる。単元の目標を常に意識できるよう、毎時間の振り返りには発表に向けてできたことと、足りないことを記述できるように働きかけ、動画撮影を頻繁に行つて、自己の成長を文字や画像など視覚的に実感できるように支援していく。

5 本時の展開（7／8時間目）（令和7年10月16日実施）

(1) ねらい

自分が調べた **Japanese hero** を伝え合う活動を通して、伝えたい内容に合わせてレベルUP表現を使えば伝えたいことが相手によりよく伝わることに気づき、これまでの発表よりもさらにくわしく表現することができる。

(2) 展開の構想

① 目的・場面・状況を明確にした目標の設定

6年生の先生のモデル動画を見て、自分達にはなかった表現を確認し、その後「もっとレベルアップして紹介したい」という気持ちをもたせてから本時の課題を設定する。

② 自分の言いたいことを表現するための段階的な活動の設定

個人の課題を解決する **Thinking time** の場面を設定し、モデル動画を参考にして、表現の仕方を確認したり、表現方法を友達と相談したりする。また、適切なタイミングで中間指導を行い、児童の英語表現を広げる良さを実感させていく。

③ 繰り返して行うペア活動の組織

ペア活動を繰り返しながら行う中で、本単元で身に付けたい、職業、性格、過去形の表現だけでなく、相手に興味をもってもらえるような表現（念押しの言葉、**Japanese hero** がしたこと、感想、自分が好き、質問など）を練習しながら確かめたり、慣れさせたりする。表現の仕方を工夫する度に、すぐに確認したり、お互いにアドバイスをしながら練習したりすることで、表現することに自信をもたせていく。

④ 振り返りによる意欲を高める工夫

「よくできた」「楽しかった」だけでなく、「〇〇さんの発表を聞いて、自分も〇〇したいです」や「今日は〇〇ができたので、発表までに〇〇したいです」と学びを深めている児童の振り返りを、クラスで取り上げ、その良さを広げていく。また、「〇〇がなかなかできなかった」と課題を意識している児童に対して、励ましを与えて次の活発な言語活動につながるよう導いていく。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	教師の働き掛け ・予想される児童(生徒)の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
導入 10	○6年生の先生の動画を見る。 ○本時の課題をつかむ。	モデル動画を流して、どんな表現を用いているか確認する。 ・念押しの言葉"He/ She is Japanese hero." を使っているね。 ・したことをもう一つ説明しているね。 ・したことの後に感想を入れているね。 ・ I like ○○. や Do you like ○○? Do you know ○○? を使って相手に興味をもってもらおうとしているね。	○児童から表現が出てこないときは、もう一度動画を見て表現を確認する。 (動画の文) Hello! My name is Kaisei. This is Momofuku Ando. Do you know Momofuku Ando? He is a businessman. He is creative and a hard worker. He started Nisshin Food Company in 1948. It is wonderful! Do you like cup noodle? I like cup noodles. He created cup noodle in 1971. It is amazing! He is Japanese hero. I respect him very much.
		◎レベルUP表現を使って、自分の発表をよりよくしよう	○「レベルUP表現」とは、念押しの言葉・したこともう一つ・感想・自分が好き・質問など、表現を充実させるための英文であることを共有する。
展開 20	○Thinking time ○ペアで発表 ○中間指導 ○ペアで発表	個人解決を促す。 ・先生の動画を見て確認しよう。 ・先生や友達に表現の仕方を聞いてみよう。 ・前時の自分の発表を見てみよう。 ・英文のカードをオクリンクで見よう。 ペア活動を促す。 ・したことをもう1つ入れて詳しくなったね。 ・質問や感想を友達みたいに入れてみたいな。 何か困ったことはないか聞く。 ・「○○した」を言いたいけれど、どうやって言えばいいかな。 昨日より伝え方をレベルアップした人の発表を見る。 ペア活動を促す。 ・さっきできなかった質問を入れてみたよ。	◇前回の授業の終わりに撮影した動画を確認したり、先生の動画を見て、相手への伝え方を考えたり、友達に表現方法を確認したりと自分で学習方法を決定する。 ○ペアで発表が終わったら、お互いにアドバイスをしたり、質問したりして次の発表に生かそうと伝える。 ○実際に児童にスピーチをしてもらい、感想や質問などの入れ方をみんなの手本として示す。 ○まだやっていないペアの友達2人と話す。
まとめ 10	○動画の撮影 ○振り返りシートの記述	スクリーンキャプチャの動画撮影機能を使って、スライドを使いながら動画撮影するよう促す。 今回使用したレベルUP表現を振り返りシートに英語で記述し、今日の学びを日本語で記入する。 ・友達の発表を聞いて、質問を入れて聞き手を意識してできるようになった。	思判表 Japanese heroをもっと詳しく知ってもらうために、レベルUP表現を用いて相手に伝えることができる。【動画】 ○机間巡視をしながら、自己の成長について書いている児童の振り返りを取り上げて全体に共有する。

(4) 評価

A L TがJapanese heroを家族に伝えたいと思ってもらうために、レベルUP表現（念押しの言葉、したこともう一つ、感想、自分が好き、質問など）を用いて相手に伝えることができる。【思考・判断・表現】 【動画】

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際

今回の実践は、友達と関わり合いながら、学びを広げて、表現力を高めるために4つの手立てを打った。

- ① 「目的・場面・状況を明確にした目標の設定」では、担任の先生のモデル動画を全体で視聴すると、自分たちにはない表現にすぐに気付き、「すごい」「自分も使ってみよう」というつぶやきの反応が見られた。6年生の先生が使っていた表現を「レベルUP表現」と児童たちと名付けて共有し、その表現を使って自分の発表をよりよいものにするという本時の課題をスムーズに作る事ができた。
- ② 「自分の言いたいことを表現するための段階的な活動の設定」では、Thinking timeで多くの児童がモデル動画を視聴し、表現の仕方を確認していた。中には、英文カードで表現を考えたり、友達や教師に相談したりする児童もいた。中間指導を行い、困り感を共有したり、手本となる児童のレベルUP表現の使い方を見たりすることで、児童の意欲が増し、その後のペア活動では、手本の児童のように聞き手を意識した質問を入れてJapanese heroを紹介する児童が増えた。
- ③ 「繰り返して行うペア活動の組織」では、②の最初のThinking timeの後は、まだレベルUP表現に慣れておらず、紹介するのに時間がかかっていた。しかし、毎回ペアを替えて練習しながら確かめ、回数を重ねることで慣れ、自信をもって紹介できるようになった。更に良かった点をフィードバックタイムで伝えてもらうことで、レベルUP表現をもっと増やしていこうという姿が見られた。
- ④ 「振り返りによる意欲を高める工夫」では、「〇〇さんの発表を聞いて、自分も〇〇したいです」や「今日は〇〇ができたので、発表までに〇〇したいです」という例文を示したことにより、その視点で24人中20人の児童が授業の振り返りを書くことができた。視点を与えて振り返りを書かせることの重要性を感じた。

(2) 研究テーマに関わる評価

4つの手立てを行うことで、2つの観点で児童の表現力の高まる様子が見られた。

① 自己の成長を記述する「振り返りシート」

単元の初め1・2時間目は単語のインプットの活動がメインで、Aさんは「ゲームが楽しかった」「カルタで1位になってよかった」と記述していた。Aさんのように本時のゴールを意識して自分ができるようになったことや、もっとこうしたいと振り返りを書く児童は、24人中4人であった。しかし、単元が進み、スライドを作成し、友達と言語活動の時間が増えるにつれ、Aさんは「前までできなかった、偉業が言えるようになって良かったです」や「性格を言えたので、今度は職業もしっかり言いたいです」のように書いていた。AさんのようにALTにJapanese heroを紹介しようという単元の課題を意識して書く児童は20人に増えた。他の4人は、「I like はいつ言えればいいですか？」と疑問を書いたり「2025の言い方が分かった」と理解したことを書いていたりしていた。

② 英語表現を確認する「動画撮影」

本時の終わりに撮影した動画を見ると、相手を意識するレベルUP表現を使用した児童は、24人中23人であった。表1のように、児童が使用した表現は、「質問・念押し」が一番多く見られた。今回の単元では、質問や念押しの言葉で、相手に興味をもってもらおうと考える児童が多かった。表1や表2に示したように、感想を入れるのが児童にとっては難しかったことが分かった。Aさんの前時との変化を表2で見る

と、レベルUP表現を5つ入れることができた。ICTを用いてモデル動画を配信し、繰り返しペア練習を行うことの有効性を全体でも、個で見ても実感できた。

表1 本時で児童が使用したレベルUP表現

	使用した人数
質問 (Do you like ○○? Do you know ○○?)	19人
したこともう1つ (He / She created / performed / played ...)	14人
感想 (It was ○○.)	1人
自分は好き (I like ○○.)	15人
念押し (He / She is a Japanese hero. I respect him / her very much.)	19人

表2 Aさんの6時間目と7時間目の紹介文の変化

6時間目	7時間目
This is Ken Shimura. He is a comedian. He is serious and famous. He performed BAKATONO.	This is Ken Shimura. <u>Do you know Ken Shimura?</u> He is a comedian. He is serious and famous. <u>Do you like comedy?</u> <u>I like comedy.</u> He performed BAKATONO in 1986. <u>He is a Japanese hero.</u> <u>I respect him very much.</u>

(3) 今後の課題

今回の実践での課題は2つある。

1つ目は、レベルUP表現の提示の仕方である。授業の最初にいきなりモデル動画を見せたが、児童自身にもっと使いたい表現を考えさせていくことが必要だった。「もっとALTに興味をもってもらえるように、使いたい表現はないか?」と問いかけ、その表現を全体で確認してから、動画を見せていけば、「先生も使っていた」「こんなのも言ってみよう」と児童の思いに沿った表現の提示ができたと考えられる。

2つ目は、中間指導の在り方である。「historyが伝わらない時、どうしたらいいですか?」「sincereって何と発音しますか?」と全体での中間指導の場面で児童から質問が上がったが、一部の児童が必要とするものであって、児童全員には必要のないものになっていた。「レベルUP表現で、使いやすいのと使いづらいのはどれだったか?」「もっとこういうレベルUP表現を使ってみようというものはないか?」など、どのような内容のものを中間指導にすると、本時の課題を振り返られたり、困り感を言い出しやすい雰囲気を作ったりすることができるのか、今後の研究で深めていきたい。

<引用・参考文献>

文部科学省，小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編，開隆堂，2018